

元代文学における「采詩」：劉辰翁の佚稿『興観集』『古今詩統』をめぐって

奥野， 新太郎
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://hdl.handle.net/2324/14620>

出版情報：九州中国学会報. 47, pp.16-30, 2009-05-12. The Sinological Society of Kyushu
バージョン：
権利関係：

元代文学における「采詩」

——劉辰翁の佚稿『興觀集』『古今詩統』をめぐって——

奥野新太郎

今日残る元人の文集中には、選集を編纂することを「采詩」と称する例がしばしば見える。古代の采詩官に起源を持つ采詩の語を、何故元人は敢えて用いたのか。何故当時この采詩活動が盛んであったのか。管見の限り、選集の編纂を采詩と呼ぶこの現象について考察した論考はいまだ無いようである。また、宋末元初の劉辰翁（字会孟、号須溪、一二三二—一二九七）は、『興觀集』『古今詩統』^{〔1〕}（ともに佚書）という二つの選集を編纂したが、彼の選集編纂も、当時の采詩活動と無関係ではなかった。本稿は劉辰翁の選集編纂について、そしてその背景にある元代の采詩という活動について考察するものである。

一 『興觀集』と『古今詩統』

まず劉辰翁が編纂した選集について整理しよう。『興觀集』については、劉辰翁「題劉玉田選杜詩」^{〔2〕}（『須溪集』卷六）に次のような記述が見える。

予評唐宋諸家、類反覆作者深意、跋涉何限。吾兒獨取其間或一二句可舉者、錄爲『興觀集』。然概得其散碎簡選語、若上下極論、長篇大意、與諸作互見不止此。

予唐宋諸家を評するに、類おほむね作者の深意を反覆し、跋渉すること何ぞ限りあらん。吾が兎独り其の間の或いは一二句の挙ぐべき者を取り、録して『興觀集』を為つくる。然れども概ね其の散碎簡選たるを得て語を選べば、上下の極論、長篇の大意の若く、諸作と互見すること此こゝに止まらざるなり。

また、劉辰翁の息子劉將孫が『集千家註批点杜工部詩集』に寄せた序文には「先君子須溪先生、……平生婁しほ看杜集、既選爲『興觀』^③（先君子須溪先生、……平生婁しほば杜集を看、既に選びて『興觀』を為つくる）」とあり、やはり劉將孫の「刻長吉詩序」（『養吾齋集』巻九）にも、父の言葉を引いて「吾作『興觀集』、最可以發越動悟者、在長吉詩（吾『興觀集』を作るに、最も以て発越動悟すべき者は、長吉詩に在り）」と見える。これらの記述から、『興觀集』とは、劉辰翁が評点を施した唐宋の詩の中から佳作を選んで編まれたものであったことがわかる。劉辰翁の子弟は彼の評点本を通して詩を学んでいた。『興觀集』も劉辰翁が子弟の為に編んだ一種の教科書であったと考えられる。

次に『古今詩統』であるが、この本については楊慎『丹鉛綵録』巻二十一「洛春謠」に次のような記述が見える。

劉須溪所選『古今詩統』、亡其辛集一冊、諸藏書家皆然。予於滇南偶得其全集、然其所選多不愜人意、可傳者止十之一耳。^④辛集中、皆宋人詩、無足採取。獨司馬才仲「洛春謠」・曹元寵「夜歸曲」、尚有長吉・義山之遺意、今錄于此。

劉須溪の選ぶ所の「古今詩統」、其の辛集一冊を亡うしなひ、諸藏書家も皆然り。予滇南に於て偶なだたま其の全集を得たり、然れども其の選ぶ所は多く人意に愜かなはず、伝ふべき者は止ただ十のうち一あるのみ。辛集の中は、皆宋人の詩なれど、採取するに足るもの無し。独り司馬才仲（標）の「洛春謠」・曹元寵（組）の「夜歸曲」のみ、尚ほ長吉・義山の遺意有り、今此こゝに録す。

「辛集」という言葉から、『古今詩統』は十千分類で編次されていたことがわかる。また、現在は散佚しているが、楊慎が生きた嘉靖年間までは確実に『古今詩統』が伝存していたことも右の文より判明する。因みに黄虞稷『千頃堂

書目』卷三一総集類、補にも「劉會孟『古今詩統』六卷」と見え、或いは明末清初まで伝存していた可能性もある。さらに、楊慎は『古今詩統』の完本を滇南（雲南）で手に入れており、この本は江西以外の地においても流通していたようである。そして、この楊慎の記述に加え、現存する『永樂大典』中にも『古今詩統』所収の作品が見える。『永樂大典』中に見える十六首に、楊慎が引く「洛春謡」「夜歸曲」を併せた十八首（二二篇）が、筆者が確認できた『古今詩統』の全てである。以下、各詩の作者と詩題を示す。括弧内には出典（①～⑯は『永樂大典』の卷数）を示す。

- ① 作者未詳「贈彭丙翁胡復初采詩」（卷八九九、詩部、宋）
 ② 宋末元初・甘泳「小絶」（卷八九九、詩部、宋）
 ③ 北宋・崔鶻「絶句」（卷八九九、詩部、宋）
 ④ 作者未詳「詭坡公次子由詩有感」（卷八九九、詩部、宋）
 ⑤ 宋末元初・陳杰「東湖晚歩」（卷三二六二、湖部、東湖）
 ⑥ 宋彭来（未詳）「西湖」（卷三二六四、湖部、西湖）
 ⑦ 北宋・劉弇「夜泊玉湖口」（卷三二六七、湖部、玉湖）
 ⑧ 南宋・蕭德藻「古梅」（卷二八〇八、梅部、古梅）
 ⑨ 中唐・項斯「寄流人」（卷三〇〇六、人部）
 ⑩ 北宋・宋庠「赴鄭出国門」（卷三五二六、門部、國門）
 ⑪ 宋末元初・劉辰翁「里門高詩」（卷三五二六、門部、里門）
 ⑫ 晚唐・崔魯「春晚泊舟江村」（卷三五七九、村部、江村）
 ⑬ 南宋・徐宝之「水西村詩」（卷三五七九、村部、水西村）
 ⑭ 晚唐・于漬「山村曉思」（卷三五七九、村部、山村）
 ⑮ 晚唐・聶夷中「勸酒」（卷二〇四三、酒部、勸酒）
 ⑯ 北宋・曹翰「賜韻、應制」（卷一三四九七、制部、應制）
 ⑰ 北宋・司馬燾「洛春謡」（『丹鉛總錄』卷二十所引）
 ⑱ 北宋・曹組「夜歸曲」（『丹鉛總錄』卷二十所引）

この中で例えば①詩は、詩題に見える彭丙翁と胡復初がともに廬陵の隣県安成の出身であり、劉辰翁とも面識があったことから、劉辰翁に親しい人物の作品と考えられる。⑤陳杰と⑬徐宝之も南宋後期の人で、劉辰翁と同郷である。②甘泳もやはり江西臨川の人である。これらのことから、劉辰翁は『古今詩統』の編纂に際して、自分の周囲の

人々の作品をも積極的に蒐集していたことがうかがえる。また⑤「東湖晚歩」詩は末尾に「如畫」という評語が見え、『興觀集』と同様、『古今詩統』所収詩にも、劉辰翁の評点が施されたものがあつた可能性がある。さらに、現存する作品は全て唐以後の人のものだが、書名に「古今」と冠する以上、その中には唐以前の人の作品も収録されていたであろう。楊慎『升庵集』卷五七に、

世以劉須溪爲能賞音、爲其於『選』詩・李杜諸家皆有批點也。……予以爲須溪原不知詩、其批『選』詩首云、「詩至『文選』爲一厄。五言盛於建安、而勃窣爲甚。」此言大本已迷矣。須溪徒知尊李杜、而不知『選』詩又李杜之所自出。

世の劉須溪を以て能く音（詩）を賞せりと爲すは、其の『選』詩・李杜諸家に於て皆批点有るが爲なり。……予以爲らく須溪原より詩を知らず、其の批『選』詩の首に云ふ、「詩は『文選』に至りて一厄爲り。五言は建安に盛んなれども、勃窣たること甚しきと爲す」と。此の言大本より已に迷へるかな。須溪徒だ李杜を尊ぶを知るのみにして、『選』詩の又た李杜の自りて出づる所たるを知らざるなり。

とある。これに拠れば、劉辰翁には『文選』の詩への評点があつたとあるが、劉辰翁が『文選』に評点を施したという事実は確認できない。或いはこれは、『古今詩統』所収の『文選』詩を指したものでないだろうか。「首に云ふ」という楊慎の言葉も奇妙な言い方ではあるが、楊慎が引く劉辰翁の言葉を、『古今詩統』の六朝卷の巻首に載せられた総評と考えるならば、かかる言い方も理解できよう。例えば劉辰翁の李賀詩への評点を収める『李長吉歌詩』（呉正子箋注、劉辰翁評点）も、巻首に劉辰翁の総評を載せており、『古今詩統』が同様に巻首に総評を載せていたことも十分に考えられる。

では、『古今詩統』に取られた作品とは如何なるものであつたのか。①劉辰翁「里門高」を例に見よう。

里門高、里門壞、百年風雨何足怪。但憐誰受沐猴烹、子孫不見烏江敗。人人知笑不知戒、春草茫茫雉爭界。

里門高し、里門壞る、百年の風雨あらば何ぞ怪しむに足らん。但だ誰か沐猴の烹るを受けんやと憐れむのみにして、子孫烏江の敗を見ず。人人笑ふを知るも戒むるを知らず、春草茫茫として雉の界を争ふを。

「高くそびえる里の門も壞れてしまったが、吹き続けた風雨を考えればそれも無理からぬ。人々は、かつて項羽を冠をかぶったサル呼ばわりして煮られた者の故事について、このような仕打ちは受けたくないものだ」と口々に言うけれども、そのサルの王者がいかなる末路を辿ったかについては一向に見ようとはせぬ。生い茂る春の草むらで縄張り争いをする雉を見て、人々は笑うのだが、それを己に重ねて戒めにしようとはとんとせぬ。」この詩は注に「類有所指（おぼひ類ね指す所有り）」とあるように、諷刺を含んでいる。処罰を恐れて権力者を批判できない人々。その権力者が如何なる最期を遂げたかについて歴史に学ぼうともせずに。そして、獲物の雉を眺める人々——モンゴル（或いは金）の脅威にさらされつつも、雉——南宋側ではそれを知ってか知らずでか、愚かにも身内の利権争いを繰り返すばかり。制作年が不明なため断定はできぬが、この詩は賈似道の專政を諷刺したものではないだろうか。劉辰翁は科挙受験の際にも、対策で賈似道の逆鱗に触れている。^⑩ そのような彼の政治に対する憤りがこの詩にも表われているように思われる。わずかに十八首しか残存せぬ中で『古今詩統』の性格を論じるのは困難と言わざるを得ないが、劉辰翁が自作の中より自ら選んだこの作品は、我々にそれをおぼろげながらも伝えるものであろう。すなわち、『古今詩統』には「里門高」のごとく、作者の主張や思いが強く表れた作品がより多く採られていたと推察される。そしてそれは劉辰翁の文學觀とも一致するものであった。なお、その他の『古今詩統』所収詩に関する本文異同などの問題については別稿で論じたい。^⑪

二 元代における「采詩」

采詩とは周代の采詩官にその端を發する。中国最古の詩歌集である『詩經』も、漢儒の説に拠れば孔子による采詩の書に他ならない⁽¹⁾。史実としての采詩官の存在については議論のある所ではあるが、少なくとも元人は一般的に漢儒の説を襲う。采詩とは元來、民間の詩を輯めて天子に献上することであり、天子はその詩を読む(聴く)ことで、各地の風俗や政治の状況を知り、自らの政治に役立てたという。樂府の起源もしばしばここに求められる⁽²⁾。そして元代になると、従来の采詩官の意味に加え、實際の選集の編纂に対しても采詩という語が用いられるようになる。例えば呉澄「詩珠照乘序」(『吳文正公集』卷十三)に言う。

古之詩、或出於幽閨婦女、山野小人、一爲采詩之官所采、以之陳于天子、肄于樂官、至今與雅頌合編、人尊之以爲經。采者、豈爲無功於詩哉。後世不復有是官、則民間有詩、誰其采之。廬陵郭友仁、窮閭之士也、以采詩自名而行四方。詩有可取、必采以去、鋟之木而傳之人、俾作詩者之姓名炳炳輝輝耀於一時。譬之珠然、所生處、澤媚而厓不枯、固異於凡物、不有人焉采之以獻、則潛于深淵、世無知者、又烏得覩其照乘之光乎。

古の詩、或いは幽閨の婦女、山野の小人より出づるも、一たび采詩の官の采る所と為れば、之れを以て天子に陳べ、樂官に肄はしめ、今に至りて雅頌と合編し、人之れを尊びて以て經と為せり。采する者、豈に詩に功無しと為さんや。後世復た是の官有らざれば、則ち民間に詩有れども、誰か其れ之れを採らん。廬陵の郭友仁、窮閭の士なり、采詩を以て自ら名のりて四方に行く。詩の取るべきもの有らば、必ず采りて以て去り、之れを木に鋟みて之れを人に伝へ、詩を作る者の姓名をして炳炳輝輝として一時に耀かしめんとす。之れを譬へて珠のごとく然り、生ずる所の処、沢は媚しくして厓は枯れず、固より凡物と異なるも、人の焉に之れを采りて以て獻する有らざれば、則ち深淵に潛みて、世に知る者無く、又烏くんぞ其の照乘の光を覩るを得んや。

ここで重要なのは、郭友仁が各地を旅して詩を輯める際に、自分を采詩官に擬えている点である。このように、各地を旅して詩を蒐集する際に自らを采詩官に喩える例が元代にはしばしば見える。郭友仁については廬陵の人という以外は不明であり、『詩珠照乘』も伝わらない。「窮閭の士」とあるから恐らくは布衣の者であろう。そのような人物が自ら采詩官を名乗る。采詩官とは先に見たように、天子或いは諸侯に仕える者であり、采詩そのものも天子の爲に行なわれた公的な営みであった。在野の布衣である郭友仁が、本来は天子に係る営みである采詩を以て自らの行爲を喩えていることは、一見奇妙な現象であると言わねばならない。そこには何らかの理由があつて然るべきである。

では彼らを采詩へと駆り立てたものは一体何であつたのか。そこには元という時代特有の動機があつたと考えられる。ひとつは、南宋接收に伴い、在野の文人が急増したことである。周知の如く、元朝は延祐年間まで科挙を停止していた。^⑤それにより、科挙による立身出世という従来のシステムの中に生きてきた文人たちは、その生き方に大きく変更を迫られた。科挙による立身出世の道を失つた宋末元初の江南の文人には、宋滅亡後は元に仕えなかつた者が大勢いた。彼らは或いは地方の学校で教鞭をとり、或いは隠居して読書著作に耽るなどの生活を送つていた。ここに、在野の文人が多く生じることになる。虞集「朔南風雅序」(『道園学古録』卷三四)に言う。

夫文學知名之士達而在上者、門人子弟其傳之、不患不遠、而萬里猶以名錄其一二者、抑將使遠方之士、得以略見其緒餘也乎。若夫山林之抱道懷藝、不得聞於當時者多矣、萬里博求而備載者、固將使有位者、得見人材之盛、因觀其所學而薦引之、有新進者、不出戶庭而得交賢雋於方冊之上。

夫れ文学知名の士の達して上に在る者は、門人子弟の其れ之れを伝へれば、遠からざらんことを患へず、而して万里(高万里)。「朔南風雅」の編者)の猶ほ名を以て其の一二を録するは、抑も將に遠方の士をして、以て其の緒餘を略見するを得さしめんとするか。夫れ山林の抱道懷芸の若きは、當時に聞こゆるを得ざる者多く、万里の博く求めて備に載するは、固より將に有位者をして、人材の盛んなるを見るを得、因つて其の学ぶ所を

観て之れを薦引し、新進の者有らば、戸庭より出でずして賢雋と方冊の上にて交はるを得さしめんとすればなり。

すなわち、既に有名な文人を遠く地方の文人たちにまで知らしめるのみならず、地方の才能を中央の者（特に天子）に知らしめることで、政府が広く人材を得るための助けとしよう、と。そして後者については「博く求め」たとあるから、編者の高万里は後者に特に重きを置いていたと考えられる。先に見た「詩珠照乘序」にも、詩を采る者がいなければ民間の詩が誰にも知られぬままになってしまふと述べられていた。元朝に出仕しなかつた文人にとつて、その名を広く世に知らしめ、さらには後世まで伝える機会を得ることは容易ではなかつた。だからこそ、志有る者が彼らの文学を探し輯める必要があつたのである。采詩の語の使用は、彼らの強い使命感と矜持の表れではなかつたか。

また、元朝に至つてついに南北が統一されたことも、その動機としてあるようである。虞集「葛生新採蜀詩序」(「道園類稿」卷十九)には次のように見える。

葛生存吾獨曰、「今天下車書之同、往昔莫及。吾將歷觀郡邑山川之勝、人物文章之美、使東西南北之人、得以周悉而互見焉。且夫風物之得以宣通、詠歌之易以傳習、則莫盛於詩。緣古者采詩之說、而索求焉。」

葛生存吾獨り曰ふ、「今天下の車書の同じきこと、往昔の及ぶ莫し。吾將に郡邑山川の勝、人物文章の美を歴観し、東西南北の人をして、以て周悉く互ひに焉を見るを得さしめんとす。且つ夫れ風物の以て宣通するを得、詠歌の以て伝習し易きは、則ち詩より盛んなるは莫し。古の采詩の説に縁りて、焉を索求せん」と。

モンゴルによつて、長年分かれていた南北は一つになった。葛生存吾は選集を編纂し、それを広めることで、東西南北の文学の流通を図つたのである。「朔南風雅序」にも「今天下一家、四方之詩皆在（今天下一家たり、四方の詩皆在り）」と見え、やはり南北統一が意識されている。そもそも「朔南」という書名自体が、そのことを如実に物語っている。祖国の滅亡と南北の統一、この対極的な二つの事件を、当時の南人が如何に受け止めたのかについては今後

究明されねばならないが、本稿で取り上げる采詩においても、南北の統一が少なからず関係しているようである。

さらにこれらに加え、詩の保存と伝承とが挙げられる。詳しくは次節に譲るが、例えば劉將孫「蕭学中采詞序」(『養吾齋集』卷九)に「古今作者之作、流落多矣、豈獨當吾世爲可恨哉(古今の作者の作、流落すること多きかな、豈に独り吾が世に当たりてのみ恨むべきを為さんや)」と見え、文学作品(ここでは特に詞を指すが)が時とともに失われることを嘆いている。詩の保存と伝承は、采詩とは切り離せないものであった。劉辰翁の評点活動が文学の伝承をその大きな動機として持つことは前稿で指摘したが、彼の選集編纂もまた、このことを強く動機に持っていた。

このような采詩の活動が、元代には盛んに行なわれたのである。趙文は「高敏則采詩序」(『青山集』卷一)で「今之所謂采詩者、大抵以一人之目力、一人之心胸、而論天下之詩、要其所得、一人之詩而已矣(今の所謂の詩を采する者は、大抵一人の目力、一人の心胸を以て、天下の詩を論ずれば、其の得る所を要むれば、一人の詩なるのみ)」と述べ、采詩の書が一人の価値観によって編まれていることを批判するが、このような批判が出ること自体が、当時采詩の書が大量に作られていたことを如実に示しているよう。

三 「采詩」に対する劉辰翁の思い

前節において元代における采詩活動について述べてきたが、では、劉辰翁自身は采詩に対して如何なる思いを抱いていたのだろうか。劉辰翁「贈采詩生序」(『須溪集』卷六)には次のように述べられる。

余謂、采藥名山、可計程必得。今江湖有幾良塗滿眼、不惟有霜霧之勞、而又有虎虺之患。裹糧逆旅、待見從容、或未及見、而其人已不可得矣。蜜之於藥、日課也。海之於珠、歲利也。若無所利而歲爲課者、惟采詩乎。然使吾不出戶庭而坐得所願者、兩生力也。俱妙年、俱作者、故所好獨在此。

余謂らく、藥を名山に采るは、計程すれば必ず得べし。今江湖の幾ど畏塗の眼に満つる有り、惟だ霜霧の勞有るのみならず、又虎兇の患有り。糧を逆旅に裹み、待見すること従容たるも、或いは未だ見ゆるに及ばざるに、其の人の已に得べからざるあり。蜜の藥に於けるや、日ごとに課あり。海の珠に於けるや、歳ごとに利あるなり。利する所無くして歳ごとに課を為すが若き者は、惟だ采詩のみなるかな。然れども吾をして戸庭より出でずして坐ながらに願ふ所の者を得さしむるは、両生の力なり。俱に妙年、俱に作者なれば、故に好む所の独り此に在り。

これは、彭丙翁と胡復初という二人の若者に劉辰翁が贈った文章である。二人の名は『古今詩統』所収の①詩にも見えていた。ここで劉辰翁は采詩について、苦勞は多いが報酬は無いと言ひ、その辛さを述べている。詩を探し求めて各地を放浪する采詩の旅は、我々の想像以上に困難なものであった。二人が体力の有り余る若者であったからこそ、この旅は成し遂げられたのである。もはや若くない劉辰翁には不可能なことであった。また、劉辰翁が采詩を「願ふ所の者」と述べている点に注目したい。采詩による選集の編纂は、劉辰翁が平素より心に願うところであった。そしてその理由には南宋の滅亡が大きく関わっている。劉將孫「送彭元鼎采詩序」（『養吾齋集』卷九）に言う。

近年不獨詩盛、采詩者亦項背相望、寧非世道之復古而斯文之興運哉。……昔吾先君子須溪先生、每哀江南百年文獻之零落、欲以詩存其爲人。蓋采詩者之行四方、以此。

近年独り詩の盛んなるのみならず、詩を采する者も亦た項背相ひ望みたるは、寧ぞ世道の復古して斯文の興運するに非ざらんや。……昔吾が先君子須溪先生、毎に江南百年の文献の零落するを哀しみ、詩を以て其の人为りを存さんと欲す。蓋し采詩の四方に行はるるも、此を以てするならん。

元軍は南宋接收に際し、江南の書物を大量に回収して大都へと送った。戦火による散佚に加え、元軍によって書物を大量に北へと持ち去られた江南文人は、自分たちの文化が失われ、後の世まで伝わらなくなってしまうという強い

危機感を抱いたであろう。²⁰ 劉將孫は言う。宋の滅亡に伴い、自分たちの文化の象徴であった書物が失われようとしていた状況を劉辰翁は深く悲しみ、そして、詩を以て詩人たちを後世へと残そうとした。近年は采詩が各地で行なわれているが、恐らく父と同じ思いを動機に持つのだろう、と。先の彭丙翁らの采詩の旅も、宋元戦争中に行なわれていた。南宋の滅亡は采詩の重要な動機であった。舒岳祥「還龍舒旧隱」(『閩風集』卷五)に言う。

今朝歸小隱、隣里喜還悲。亡國誰修史、遺民自採詩。鼠營新穴壞、鶴理舊巢枝。見說寅年泰、冥心待運移。

今朝 歸りて小隱たり、隣里 喜び還た悲しむ。国を亡び、誰か史を修めん、遺民 自ら詩を採る。鼠は新しき穴 壞を営み、鶴は旧き巢枝を理む。見説く寅年泰らかならんと、冥心して運の移るを待つのみ。

舒岳祥は劉辰翁と同世代の文人で、この詩は南宋滅亡後に詠まれたものであろう。ここに詠まれているように、祖国が滅びた後、遺民として残された文人たちに課せられた重要な使命が、歴史の編纂であり、そして采詩(採詩)であった。詩中で「修史」と並列されていることから、彼らにとつての采詩という活動の重要性がうかがえる。そして当時、これらを一身に担い、実践した人物がいた。金末の元好問である。彼が金一代の詩を輯めて編んだ『中州集』は、彼の生前に出版され、虞集や劉將孫のように、『中州集』に倣って実際に選集を編もうとした文人もいた。江南で行なわれた采詩活動には、元好問の『中州集』の影響もあったようである。

元代の采詩には、自分たちの詩を残さねばならないという、元人の強い意志と使命感があり、そしてそれは劉辰翁も強く共感するところであった。采詩の語の使用は、そのような彼らの思いの表れであらう。在野の文人の詩を泯没から救わんとするのも、自分たちの詩を失ってはならないという点において、その志を同じくするものである。後進の教育もまた然りである。元代ににわかに盛んになった采詩とは、かかる元代特有の動機をその背景に持っていたと考えられるのである。

四 まとめ

以上、劉辰翁の編纂した『興觀集』『古今詩統』、及びその編纂の背景にある元代の采詩という活動について述べてきた。選集の編纂自体は古来より連綿と行なわれてきたものであるが、それが采詩という語を用いて行なわれたという点で、元代はやはり特徴的な時代と言えよう。この采詩という語には、元人の強い使命感が込められていた。

江南は華北とは異なり、比較的無傷のままモンゴルの統治下に入った。元初の江南は、小規模の反乱はいくつか起こりはしたものの、総じて平和であったと考えられる。このような状況の中、祖国を失った南宋文人たちは、如何なる思いを抱き、また、如何なる活動をしていたのか。モンゴル統治下における彼らの活動を考察することは、彼らがモンゴルによる統治をどのように受け止めたかという問題に繋がるものである。本稿で論じた采詩は、彼らの活動のほんの一部ではある。だが、些細な現象ではあるものの、この時代に、自分たちの詩を輯め、そして後世へと積極的に伝え残そうとする動きが起こったことが文学史上に持つ意味は、小さくないように思われるのである。そして、劉辰翁の活動もそのような動きの一環として捉えてよい。彼の大量の評点や子弟の教育、そして本稿で取り上げた選集の編纂は、全てかかる思いをその動機の根本に持つものであった。

最後に、本稿で詳しく触れることはできなかったが、現存する采詩に関する記録を見る限り、この活動に携わった者には江西の人間が多い。単に資料の残存状況の偏りによる可能性も否定できないが、采詩は特に江西において盛んであったと考えられる。江西という土地と采詩活動との関係については、機会を改めて考えたい。

- (1) 馬群「劉辰翁事跡考」(『詞學』第一輯、華東師範大學出版社、一九八一年)には兩書の存在が指摘され、『興觀集』については、高津孝「宋元評点考」(『鹿兒島大學法文學部紀要人文學科論集』三一號、一九九〇年。のち潘世聖等訳「科挙与詩芸——宋代文學与士人社会」(『日本宋學研究六人集』、上海古籍出版社、二〇〇五年)に中国語訳を収録)にも言及がある。
- (2) 本稿で引用する劉辰翁の詩文は文淵閣四庫全書所収『須溪集』十巻を底本とし、適宜諸本を参照した。
- (3) 『養吾齋集』未収。『集千家註批点杜工部詩集』(天理図書館善本叢書漢籍之部第四巻、八木書店、一九八一年)に拠る。
- (4) 楊慎は総じて劉辰翁の文學批評に対して批判的ではあつたが、肯定否定に拘わらず、劉辰翁に関する記述を自身の著作中に多く残している点では、劉辰翁研究において貴重な人物である。
- (5) 『永樂大典』の檢索には衣川強編『永樂大典索引』(白帝社、二〇〇一年)を用いた。
- (6) 『永樂大典』中に作者名が記されない詩については、以下の考証に基づき作者名を補つた。②詩は『天下同文集』巻四に甘泳「小絶」として収録。③詩は『永樂大典』巻八九九・十二葉表に崔德符(鷗の字)「絶句」として引かれる。⑤詩は陳杰「自堂存稿」巻四に「東湖晚歩洪恩橋海棠洞三首」其一として収録。⑧詩は『後村詩話』後集巻二に蕭千巖(德藻の号)「古梅二絶」として引かれる。なお⑥詩について、『永樂大典』に見える「宋彭來西湖」の五字を本稿では「宋彭來の『西湖』詩」と解釈したが、宋彭來なる人物に関する資料は管見の限り見つからず、疑問が残る。
- (7) 『須溪集』未収。段大林校点『劉辰翁集』(江西人民出版社、一九八七年)もこの詩は採らない。『全宋詩』巻三五五(北京大學出版社、一九九一年)には採られるが、出典を『古今詩鏡』と誤る。
- (8) 『史記』項羽本紀に「項王見秦宮室皆以燒殘破、又心懷思欲東歸、曰、『富貴不歸故郷、如衣繡夜行、誰知之者。』説者曰、『人言楚人沐猴而冠耳、果然。』項王聞之、烹説者」とある。
- (9) この注が誰のものなのかについては未詳。注の内容からは、劉辰翁による自注とは考えにくい。
- (10) 『宋史翼』巻三五に「壬戌(一一二六)廷試、賈似道專國、欲殺直臣以塞言路。辰翁因言、『濟邸無後可憫、忠良戕害可傷、風節不競可憾。』雖忤賈意、而理宗嘉之、眞丙第一とある。
- (11) 参考までに一例を示せば、例えば⑤「勸酒」の本文は『古今詩統』では「灞上送行客、聽唱行客歌。適來橋下水、已作渭川波。人間樂樂少、四海別離多。但恐別離淚、自成苦水河。勸爾一杯酒、不見葉辭柯」とあるが、他にこの詩を載せる『文苑英華』巻一九五、『石倉歷代詩選』巻一〇一、『全唐詩』巻六三六ではすべて結句「不見葉辭柯」を「所贈無餘多」に作る。『古今

詩統』或いは『永樂大典』の目移りなどによる誤写の可能性もあるが、「不見葉辭柯」句を持つ作品は管見の限り他には見つけられず、また詩意や押韻の上でも問題は無く（『広韻』では歌・多・河・柯は下平七歌、波は下平八戈）、従来提出されていない該詩の異文である可能性が高い（「多」字の繰り返しを避ける上ではむしろ『古今詩統』の方がよいとすら思われる）。

(12) 『漢書』芸文志に「書」曰、「詩言志、歌詠言。」故哀樂之心感、而歌詠之聲發。誦其言謂之詩、詠其聲謂之歌。故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也。孔子純取周詩、上采殷、下取魯、凡三百五篇、遭秦而全者、以其諷誦、不獨在竹帛故也」とある。なおこれは、『礼記』王制の「天子五年一巡守。……命大師陳詩、以觀民風」という記述に基づく。

(13) 『漢書』芸文志に「自孝武立樂府而采歌謠、於是代趙之謳、秦楚之風、皆感於哀樂、緣事而發、亦可以觀風俗、知薄厚云」とある。

(14) 『元人文集珍本叢刊』三・四（新文豊出版、一九八五年）所収。

(15) なお、科挙の停止を元朝の中国文化への無理解の最たるものとして見る向きは多い。だがこれは、「九儒十丐」と同様に、多分に誤解と思い込みを含んだものである。科挙は、南宋後期の段階で既に多くの批判を受けていた。科挙の停止に対する元初の文人たちの反応については、三浦秀一「中国心学の稜線 元朝の知識人と儒道仏三教」（研文出版、二〇〇三年）中篇附論「元朝南人における科挙と朱子学」を参照されたい。

(16) 四部叢刊初編所収。

(17) 『元人文集珍本叢刊』五・六所収。

(18) 拙稿「劉辰翁の評点活動と元朝初期の文学」（九州大学中国文学会「中国文学論集」第三七号、二〇〇八年）を参照。

(19) その他、呉原可にも「送彭丙翁胡復初采詩」詩がある（『乾坤清氣』巻五）。胡復初は劉辰翁の友人胡端叔の息子で、劉辰翁が字を授けた。彭丙翁はこの采詩の書をきっかけに劉辰翁に師事し、劉將孫とも友人であった（劉將孫「彭丙公詩序」『養吾齋集』巻十一）。また胡端叔の孫娘が彭起翁なる人物に嫁いでおり、丙翁は起翁の同世代の宗族であるかもしれない。劉辰翁「江村記」（『須溪集』巻四）、劉將孫「江村先生胡公墓誌銘」（『養吾齋集』巻三一）を参照。二人とも劉辰翁と親しい間柄であった。

(20) なお元代の出版の隆盛は、宮紀子氏の一連の研究（『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）など）に代表されるように、近年盛んに主張される。だがそうした事実とは別に、宋滅亡直後の南宋人の心情として、書物の亡失を

恐れる感情があつたことは充分に考えられよう。

(21) 「龍舒」とは浙江省にある山の名。もとは龍鬚山という。舒岳祥「咏龍並序」序文(『閩風集』巻九)、「篆畦詩序」(同巻十)を参照。

(22) 「見説寅年泰」句には「民謠有『虎嘯太平年』之句」と注がある。「寅年」とはすなわち戊寅の年(一二七八年)を指す。この年の閏十一月、文天祥は元軍に敗れて大都に連行され、翌年正月、衛王趙昀らは崖山より海に身を投げた。寅年が太平どころか南宋の最後の年になってしまったことをこの句は言っている。

(23) 『中州集』は海迷失后元年(一二四九)に真定提学趙国宝の援助のもと板刻が開始され、憲宗五年(一二五五)に出版された。その二年後(一二五七)に元好問は亡くなっている。

(24) 『元史』巻一八一虞集伝に「欲取太原元好問『中州集』遺意、別爲『南州集』以表章之、以病目而止」とある。また劉将孫「送臨川二艾采詩序」(『養吾齋集』巻九)に「予嘗讀『中州集』、憐傷其意、以兵餘亂後、史佚人亡、存其梗概於此。因念東南百年文獻爲盛、今渺然誰復睹記。……嘗欲效『中州』體、因其詩各爲之小傳、以待方來」とある。